
冷蔵庫

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷蔵庫

【Nコード】

N0342P

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

家出中の四人組。が、軍資金の先が見えてきた。だったら「おねーさま」に頼ればいいんでない？ きつと喜んで助けてくれるさ。外部サイト「みくり」掲載作品です。

「残高見たい？」

秋樹がにっこりと通帳を掲げた。

「謹んでご辞退申し上げま……」

「じゃあ口頭で」

言わせも果てず、容赦なく金額を告げる。……結構少ない。少なくなっている。

「ところで四人が一日三回、百五十円のパンを食べるとすると」

「わーった、わーった！俺が悪かったって」

「悪かったなんて。置き忘れたなら仕方ないよ」

……怖いんだよおまえの笑顔は。

要するに。財政事情を顧みず、ゲーセンなんぞで遊んだ揚句、財布をなくしてきた俺に対して。

秋樹どのはご立腹なのだ。

ゲーセンで使ったとバレただけなら、俺の取り分なんだからいいだろうと言えた。財布ごとなくなったのは、痛い。

「あー、その。一週間食事抜きつて辺りで」

「岡野さん、春花。子守り頼んだ」

俺にひたりと目を据えたまま、秋樹はあとの二人に呼びかけた。こちらから提案した罰は一顧だにされなかったらしい。

「あ……」

「りょーかい」

「何が子守りっ」

ささやかな抗議も黙殺して、背を向けてすたすた去っていく。どこへ何しに行くとも告げない。こいつはそういうやつだ。

残った女子組の片方は心配そうに、片方はじっとりと俺を見ていた。

「で？ 幾ら使ったの、ゲーセンで」

「引き継ぐな！」

「あたしだって知りたいもん。月島君が遊んだお金で何日食べられたのか」

一人が文句を言う横で、

「一日……千八百円、千八百で割ると……」

あと何日で貯金を食い潰すことになるか、計算してもう一人が青ざめている。どっちも味方にはなりそうにない。

俺たち四人は施設育ちで、育った施設で酷い目に遭って、耐えかねて揃って逃げ出してきた。以来基本的に四人で過ごしているのだが、中学生と小学生の集団だから色々不自由はあって、経済的な問題も大きな一つだった。要するに自力で稼げないってことだ。

俺と秋樹は同じ年なのだが、秋樹は当たり前のようにリーダーの位置にいた。まあ、問題児として知られていた俺と優等生で通っていた秋樹とでは、どちらが信頼されるかは目に見えている。……言っとくが、優等生が、じゃない。優等生としての外面を維持する能力のあるやつが、だ。

で、そんなわけで通帳は秋樹が握っている。言うなれば一週間の小遣いとして、月曜になると幾らか引き出してきて分配するのである。だから——寿命は一週間縮まったにすぎない。一週間以上の生活費は財布に入っていなかった。口座の残高があれだけなら、どのみち近々使い切ってしまうし、四人で一日千八百円なんてきりつめにきりつめた数字だ。

「俺がなくさなくても、あんまり変わんなかったよーな」

「それとこれとは別！ 心がけの問題っ」

あ、そ。

「ま、それはいいとして」

「よくない」

「よくないとして。あれが俺らの全財産つてのは、実際ヤバいな」
貯金が底をついたら。何もやりようがなくなったら。

一番恐ろしいのは、施設に戻る破目になることだ。想像したのか、

二人は黙り込んだ。俺にも笑い飛ばせない。

だからって、宝くじにでも当たらない限り、いきなり大金が転がり込むことはない。稼げないなら、拾うか、貰うか……。

「ああ！ 河野のおねーサマ！」

俺は手を打ち合わせた。

「あの人にお縋りできるんじゃないの？」

「やあおねーサマ、ブリックレーブリット！ 元氣してる？」

「おや、久しいね、流浪少年」

電話の向こうから幸先のいい声が聞こえた。

河野のおねーサマと知り合ったのは、施設を飛び出して間もない頃だ。今は大学生で、学生の一人暮らしには勿体ない広さの部屋を借りている。実家がなかなかの金持ちなんだとか。

前にもしばらく泊まり込んだことがある。俺らが、というより秋樹が使っている郵便局の口座も、元はおねーサマが開いたものだ。大金を生で持ち歩くのも危ないと、新規開設の上、中身のおまけつきで下賜されたというわけ。

「あたしも出先なんだわ。帰る途中なんだけど、まだ四、五十分かかると思う」

「こつちもそんなもんだよ。じゃ、ヨロシク」

話をつけて電話ボックスから出ると、既に秋樹は戻っていた。喋りすぎたらしい。

「河野さんは何て？」

二人から聞いていたようで、開口一番の問いはそれだった。

「近くまで来てるって言ったら、どうせならうちに来いってさ」

「なら、行こうか」

あつさり認めた。何かしら言われるだろうと思ったんだが。

おねーサマのマンションへはここから電車で一本、徒歩と合わせ一時間ぐらいだ。久しぶりだとか元氣かなとか喋りながら女子組が並んで前を歩き、俺と秋樹が後ろについて駅への道をたどった。

「で？ 河野さんにたかるそうだけど」

…… あー、やっぱり言うのか。

「いーだろ。おねーサマも満足だよ」

金持ちの道楽なのだ。助けてほしいと言えば喜んで泊めてくれるし、軍資金ぐらい振り込んでくれる。さぞ気持ちがいいことだろう。縁もゆかりもないというのに、自分はなんて親切なのかと。

「喜ばせるために頼る？ それとも利害が一致するから？」

我らがリーダーは横目でこちらを見やった。というか、流し目に近い。これがどぎまぎするのだ、とつくに見抜かれてるような気分になる。

前の二人の様子を窺った。小声めにすれば聞こえない、かな。

「――巻き上げてやりたいじゃん？ 金を恵んで酔ってるやつから助かっているのは事実だ。その事実を後盾に、おねーサマは自分自身に浸り込める。俺たちを使つて。」

それなら、どうせなら、とことん搾り取つてやりたいじゃないか。

「君は河野さんに懐いてると思つてたけどね」

「そりゃあおねーサマは楽しい人だから。無理して媚びなくて済むのサ」

それがいいところだ。おねーサマと会つて喋つて、楽しいのは確か。こんなやつで金で生きたくないと感じるような相手じゃない――

――あの人になら、恵ませてやつてもいい。

秋樹はしばし黙り、俺は少々どきどきしながら次の反応を待った。

…… カナシイな、タメだつてのに……。

「ん？」

不意に封筒を突き出されて目を瞬く。受け取つて覗けば、中身は財布に入っていたはずの額――なくしたのと同じだけの金額の紙幣と硬貨だった。正確には少し足りないが、ゲーセンで使った分を見繕つて差し引いた結果だろう。

つまり、さつきはどこへ何をしに行つていたのかというと、郵便局へこれを下ろしに行つていたわけだ。俺の失敗に対して、金銭的

なペナルティは課さないということらしい。

「さんきゅ」

囁けば含みのある笑みが返ってきた。こいつにはこれが普通だ、素直な笑顔なんて見せたことがない。だから逆に、いかにも裏のありそうな笑みは、必ずしも裏があることを意味しない。はずだ。

やがて駅に到着した。女子組に聞こえるところでは、ああいった話はしないことにしている。それから会話は他愛のない、差し障りのないものになった。

マンションの手前でおねーサマと合流した。

「泊まってくでしょ？」

「よければ」

「じゃあキャベツを使い切れるな」

あつは、そーいえば、一人暮らしでキャベツを一玉使い切るのは大変だつていうねえ、なんて暢気に笑っていたのだが。

何故か夕飯前、他の三人が奥の部屋で寛いでいるときに、俺だけはおねーサマと台所にいた。

「なんで俺、ご指名？」

「由真と春花は前のとき手伝ってくれたもん。今回はおまえが働け」
秋樹はどうなんだよ。

女子組の片方が手伝おうとしたのも秋樹が止めてたし……ひよつとしてこれがペナルティか？ いつの間に示し合わせたんだ？

「内緒話でもしたいわけ」

「別に。お金の話は秋樹の担当でしょ？」

「そう言うなら全部秋樹の担当だよ」

「偏ってるねえ」

おねーサマは笑った。

台所に立つなんて施設時代にもなかった。物珍しさもあって、口で言うほど悪い気はしない。本日のメインディッシュはロールキャベツで、確かにこれならキャベツを一気に消費できる。ついでに女

子組の好物でもある。なかなかいい選択だ。

「——買い込みすぎだよ、おねーサマ」

呆れた声を上げたのは、冷蔵庫を開けたときだった。一人暮らしなのである。何だよ、この中身の充実具合は。金があるからってこんなにたくさん——。

……。

ひよつとして……？

「ちゃんと全部食べてるわよ。無駄にはしてない」

「——ならいいけど？」

そつと閉める。それから目的の物を取り忘れたのに気づいて、慌てて開け直して笑われた。

次の日は午後から授業があると言って、おねーサマは出かけていった。最初の頃は流石に、留守宅に俺たちを残してはいなかったものだが。

「……なあ、秋樹」

女子組が奥の部屋で本を読み始めてから、俺は冷蔵庫を開けた。

「おねーサマって炭酸ダメだったよな」

「そのはずだね」

じゃあ、これは何だ？

扉の裏に立っていたサイダーのペットボトルを、取り出して秋樹に示す。俺の気に入りの銘柄だ。

ひよつとして。

俺らがいつ来てもいいように常備してある、なんてことは。食材を多めに用意して。俺ら好みの内容を揃えて。

俺らが現れてから買いに行っても、勿論構わないはずだ。が、それだと思わせつけることになる。俺らのためだと声高に主張するも同じになる。

言わんとすることを、秋樹は読み取ったらしい。

「一人暮らしが寂しいのかもしれないよ。それで僕らを待ってたの

かも」

歩み寄ってきた、と思うと、開けたままだった扉を閉めた。

「何の証拠にもならないさ。どう解釈したいかだ」

「おまえはどう思う？」

「車一台分振り込んでおいてくれるってさ」

一瞬何のことかと思った。生活費の話だ、今回ここに来たきつかけの。車一台分、という価格設定がおねーサマらしい。

「その事実があれば結構。河野さんの本心がどうでも」

……そうやって割り切れるから、秋樹は優等生でいられたのだ。人格と行為を分けられるから。

けど、俺は気にしてしまう。道楽に過ぎないのか、本当に案じているのか。自分のためなのか、俺たちのためなのか。

俺たちを本気で心配してくれる人なら——たかってしまつて、よいものか。

リーダーは肩を竦めた。

「本気で心配してるなら家出の協力はしないさ。保護して学校に行かせるよ、将来のために」

それはまあそうかもしれないけど、そんなことはこっちは望んでいない。保護だの何だの余計なことは、しないでいてくれた方がありがたいんであつて。

……ああ。

秋樹の微笑に気づいて悟つた。そういうことじゃないんだ。

「そうだな」

そう思つた方が——気が楽だと。

親切だとしても無責任なのだ。優しいとしても浅はかなのだ。いい加減で片手落ちなのだ。それなら、感謝ばかりしなくてもいい。それで行こう。

「人の家の冷蔵庫なんて勝手に開けるもんじゃないんだよー？」

口うるさいのが隣の部屋から、サイダーを見咎めて声を上げた。
「いーんだよ。おねーサマの物は俺の物」

「図々しいんだから」

ぺろんと舌を出して返答に代える。寧ろ満足だろうよ、そのために買っておいたはずなんだから。

特別喉が渴いていたわけではなかったが、俺はその場でサイダーを飲み干した。車一台分のお返しだ。後で空のペットボトルをみつけて、おねーサマは悦に入るだろう。

（後書き）

連作として「汗ばむ」「そんな気がしてた」掲載しています。併せてお読みいただけると嬉しいです。（2011/9/26）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0342p/>

冷蔵庫

2011年9月27日03時13分発行